

北海道大学における英会話上達度試験

ジョセフ・トメイ

北海道大学言語文化部

Oral Proficiency Test in the English Speaking Course in Hokkaido University

Joseph Tomei

Lecturer, Institute of Language and Culture Studies

Hokkaido University

(翻訳版)

北海道大学の一般教育過程のために、私たち外国人講師は、学生の英会話上達度の最低レベルを保証するために、「北大英会話上達度試験 (Hokudai Oral Proficiency Test, HOPT)」を発案した。この試験は、日本の学生の特殊な弱点に狙いをしぼり、かつ現実に実行可能であるように設計された多くの興味ある特色を含んでいる。私たちはいま英会話科目を選択している学生のすべて(学期あたり約600人強)にこの試験を課している。このような試験が一般教育課程を修了するための要件として大学全体で適用されることを期待している。

1. はじめに

コミュニケーション能力が外国語教育の重要な側面であるとの認識が強まるなか、真の会話能力を評価する検査の手段が探し求められている (Morrow 1986)。会話の上達度は厳密に客観的なものさしで測ることはできないと考えられている一方で、それにもかかわらず会話でのコミュニケーション能力の検査が価値のある望ましい手段として現れてきた (Weir 1990)。

1994年4月から、日本の高等学校に入学した生徒は、旧カリキュラムと比べて会話でのコミュニケーションにはるかに比重をおいた新しいカリキュラムに迎えられた。こうして、1997年4月から大学に入学する学生は、高校教育において少なくとも1年間の英会話の授業を終えているであろう (Gould, Madley & Carter 1993a; Gould, Madley & Carter 1993b)。従っ

て、前よりも多くの会話訓練を受けて大学に入ってくる1年生の新しい期待と能力に答える必要が起きてきた (これらの問題についての詳細な議論については Nishihori & Stapleton 1995 参照)。

異なる教師の授業の間にさらなる調和をもたらす方法として北海道大学での会話によるコミュニケーションを評価する手段の必要性が感じられた。

試験によって1年生レベルでの英語教育に次のいくつかの利益をもたらすことを狙う：

- (i) さらなる会話重視のカリキュラムへの移を承認すること
- (ii) すべての1年生に対して会話上達度の最低基準を設定すること
- (iii) 将来に対するポジティブな余波を確立すること
- (iv) 将来のカリキュラムに対して方向を示すこと

(v) すべての学生の口頭試験の経験を可能にすること

これらの目標を念頭において、言語文化部の外国人講師たちは北大英会話上達度試験(Hokudai Oral Proficiency Test, HOPT)を案出した。今学期には第4回HOPTを実施し、これにより、私たちは2,000人以上の北海道大学のすべての学部からの学生を面接試験し、英語を使って彼ら自身のアイデアや考えを他の学生に伝える能力によって彼ら进行评估することになる。以前の論文(Brown, Glick, Holst, Stapleton and Tomei 1995)では、北海道大学での英会話授業を背景として最初に開発された試験が論じられた。この論文においては、現在の形の試験の概略を述べ、それからこの試験を独特のものにしているいくつかの側面について議論したい。

紙数の制限のために、上達度に基づく教育の広い潮流との関連について詳細には述べられない。しかしながら、この試験は語学教育に対する会話によるアプローチ(概観についてはBrumfit & Johnson 1979参照)と呼ばれてきたものに基づいている。また、HOPTは私たちが北大で見出した特殊な状況に合わせてデザインされているので、必ずしもすべての点が他の教育環境に当てはめられないかもしれない。

2. 現行の試験手法

現行の試験は異なるクラスからの3人の学生を一組にしての試験である。異なるクラスからの学生を集めることによって、学生は知らない学生と話すようになることがかなり期待されるようにしている。客観性をさらに確実にするために、学生たちは彼らのE3の先生ではない先生によって試験される。学生はダイナミックに、すなわち試験当日に、面接試験に登録し割り振られる。このようにして、学生はランダムに分配され試験室に入るまで誰と一緒にいるのか分からない。彼らを試験する先生は学生たちに始めさせ終わらせるだけで会話には加わらない。

試験は2つの部分に分けられる。

2.1 第1部

試験のこの部分では、次の表からランダムに選ばれた話題が与えられる：

- ・ 家族と友人たち
- ・ 食べ物と飲み物

- ・ 課外活動
- ・ スポーツ
- ・ 学期外のバケーション
- ・ 出身地

これらの話題は、それらを会話の出発点に使う学生たちになじみがあることと、外国人教師が行う授業に対するそれらの関連性のために選ばれてきた。その話題は単なる出発点であって、会話が異なる話題に移ってもかまわないことが学生たちに告げられる。学生たちは5-7分のあいだ話すことを求められ、その間に先生が彼ら进行评估する。この部分の狙いは、学生たちが、すべて英語で、彼ら自身についての情報を与え他の人に質問することである。

2.2 第2部

面接試験の当日、試験に登録する間に、学生たちは短いビデオを見て配布された書式(付録1)を使ってメモを取ることを求められる。ビデオはロンドン、東京、ハワイそして沖縄への4つのパッケージ・ツアーのプレゼンテーションである。学生たちはその情報を取り入れ、配られた書式のメモを使用し、どのツアーが最善であるか意見を述べあうことを期待され、その間に再び先生が彼ら进行评估する。正しい答えはない。この部分の目的は、学生たちに彼らの意見を述べ他の人の意見に反論することを学んでもらうことである。

2.3 評価基準

評価は、不可(fail)、可(pass)そして優(honors)の3段で行われる。可に対する要件は、正確さと文法的構造の観点からはあまり課さないで、与え受け取った情報の観点から課している(付録2)。これは、言い替え、婉曲的な表現、そして個別の構造や語彙を完全にマスターする上での諸問題を会話上で克服するような技能の使用を強調している。この強調は、日本の学生についての特別の問題点(これらの問題についての議論についてはAnderson 1993とNozaki 1993を見よ)であるが、学生たちにコミュニケーションへの意欲を高め、話し相手の必要性に気付くよう促している。

優は優秀であることと平均より上であることの双方を表している。(Omaggio Hadley 1993より取られた)ACTFLの上達度条件の観点でいえば、優はhigh intermediate から superior に当たるといえる。これは

広い範囲にわたる能力段階であるが、意図は実施する先生にとって試験を実行可能なものにするのである。説明のたびに、HOPTは運転免許試験にたとえられてきた。運転免許試験は試験を受けるすべての人を分類しようとするのではなく、単に試験に合格するための最低基準を設定するものである。別の表現をすれば、運転免許試験の試験官はある受験者が優秀なドライバーであることに気付くかも知れないが、試験官がそのドライバーがF1ドライバーになれるかどうかまで見極めるとは誰も期待していないのである。

可と不可のあいだの線引きに関するこの強調は、試験官がボーダーライン上の場合だけに集中することを可能にしている。これは、試験を実施する際の実務上の問題点である、試験官の負担をかなり軽減することにも役立っている。

2.4 現行のE3科目との関係

試験はE3科目の独立な可/不可条件として導入された。それは、ある学生が授業でどんなに優秀であっても、この試験で不可を取ればE3科目が不可になるということを意味している。しかしながら、試験は独立な存在として課されるのではない。授業において、私たちは学生たちに試験についての情報を与え、彼らに同級生と話すことによって試験のための練習をする機会を与えている。また、試験に合格するのに問題点を抱えているような学生が見分けられ特別の手助けを与えられるように安全策を開発した。これは警告の手紙と1週間の任意参加の補習授業である。

2.5 HOPTの独自の面

会話上達度面接試験に対する一般的なモデルは、ACTFLの会話上達度面接試験(Oral Proficiency Interview OPI)であった(試験の実施要領とこの手法の背後にある哲学に関する詳しい議論についてはBuck, Byrnes and Thompson 1989を見よ)。この方式は、10分から25分間の1対1の会話に基づき、面接試験官が、受験者が会話を続けられなくなる点まで注意深く会話を誘導し、受験者の能力の上限を見極めるのである。これは、この試験を過剰に単純化しているかもしれないが、2つの重要な側面に光を当てている。第1点は、面接試験官が会話の中に完全に加わらなくてはならないということで、OPIは非常に手間がかかることである。次に、学生の能力を評定する仕組みが

学生がつまづくことを必要とすることである。他の著者たちもこの点がこの試験の弱点であることを指摘している(Savignon 1985; Bachman and Savignon 1986)。OPIが学生の面目をおびやかしたり失ったと分らせるという問題は、体面重視文化のゆえに、日本の学生たちに適用するには格別の弱点である。HOPTにおいては、学生の能力を厳密に決める必要がないので、これらのやっかいな問題点は両方とも避けられている。

他の面接試験の手法とおそらくもっとも異なる点は、3人の学生を同時に面接試験することである。1対1の面接試験または2人1組の面接試験においては、やりとりや会話全体の丸暗記を避けるように気を付けなければいけない。これは、日本の学生に適用するときには、彼らがしばしば高度に開発された暗記技術を持っているので、特別の問題である。3人の学生をランダムに選んで組み合わせることは、前もって知っている話題を与えられていても、暗記してきたやりとりを使うことを実質的に不可能にしている。加えて、このダイナミックな設定では、会話に加わりながら評価するというよりは、先生は後ろに下がって学生を評価できる。さらに、3人の学生を使うことは、考えを言い表すことと臨機応変の能力が簡単に測られるだけでなく直接的な役に立つ応用として授業でも発揮され得るような、自然な設定を創り出している。この種の設定はおそらく現実的である。なぜなら、学生は、リングアフランカ(意思伝達手段としての共通語)として、英語を母語とする人よりはむしろ他の英語を母語としない人と話すために、英語を使うことの可能性が高いであろうから。

学生同士で会話させる最後の利点は、少ない時間で多くの学生を面接試験できることである。この形式の試験が扱える学生の数について見当をつけてもらうためにいえば、6人の外国人講師と事務的作業の担当者によって最近実施したHOPTでは、1日8時間で約600人の学生をこなしたのである。

2.6 HOPTの授業への影響

主観的であるが、HOPTは授業にいくつかの為に効果を与えてきたと思う。第1に、私は授業での成績で可不可の決定をしなくてよくなり、優良可の決定に注意を向けることができ、それらの評価が学生に意味のあるものになった。さらに、同時に教師であり評価者であるという事態は解消され、教室では

教師としての役割に集中し、試験においては評価者としての客観的役割を果たすことができるようになった。

第2の利点は、会話能力の獲得を直接に支援する教材と方法に集中することができるようになったことである。自分の教材と方法を磨き上げることによって私は教師として進歩したと感じている。

最も重要な利点は、この試験が学生の授業への参加意欲を劇的に高めたことである。比較的容易に述べられる1組の会話技術を獲得すれば試験に合格できるので、学生が会話能力を獲得することと試験に合格することとの直接的なつながりを理解し、授業において練習がなおさら意味のあるものになっている。

3. まとめ

この論文では、北大英会話上達度試験について簡潔に述べ、この試験のいくつかの独自な点について議論した。それから、この試験が学生の勉強だけでなく授業における私自身の教え方にも影響を与えたことを述べた。この試験は一般教育課程の終了要件とされるよう現在努力されている。これが、文部省によって新しく交付された学習指導要領を補完するような、一般教育課程に対する英語教育カリキュラムの標準化への一歩となることが期待されている。もっと重要なことは、それが学生に自立と責任の尺度を与え得ることである。これらはアンビシャスな目標であるが、前兆はきわめて有望であることを示している。

参考文献

Anderson, F. E. (1993), "The Enigma of the College Classroom: Nails that Don't Stick Up." in Wadden, P. ed., *A Handbook for Teaching English at Japanese Col-*

leges and Universities. Oxford: Oxford University Press

Bachman, L. and Savignon, S. J., (1986), "The evaluation of communicative language proficiency: A critique of the ACTFL oral interview," *Modern Language Journal* **69**, 129-142

Brown, C., Glick, C., Holst, M., Stapleton, P., and Tomei, J. (1995), "Interview testing for oral proficiency: a pilot test for the Hokudai Oral Proficiency Test (HOPT)," *The Journal of Language and Culture Studies* **30**(1), 219-238

Brumfit, C. J. and Johnson, K. eds. (1979), "The Communicative Approach to Language Teaching." Oxford: Oxford University Press

Buck, K., Byrnes, H., and Thompson, I. eds. (1989), "The ACTFL Oral Proficiency Interview Tester Training Manual." Yonkers, N. Y.: ACTFL

Gould, R., Madeley, C., and Carter, N. (1993a), "The New Monbusho Guidelines," *The Language Teacher* **17**(6), 3-5

Gould, R., Madeley, C., and Carter, N. (1993b), "The New Monbusho Guidelines, Part Two," *The Language Teacher* **17**(11), 3-7, 39

Gould, R., Madeley, C., and Carter, N. (1994), "The New Monbusho Guidelines, Part Three," *The Language Teacher* **18**(1), 4-7

Morrow, K. (1986), "The evaluation of tests of communicative performance," in Portal, M. ed., *Innovations in Language Testing.* Windsor: NFER-Nelson

Nishihori, Y., and Stapleton, P. (1995), "Communicative study materials for the proposed course revision in 1997: A rationale," *The Journal of Language and Culture Studies* **28**(1), 181-209

Nozaki, K. N. (1993), "The Japanese Student and the Foreign Teacher," in Wadden, P. ed., *A Handbook for Teaching English at Japanese Colleges and Universities.* Oxford: Oxford University Press

Omaggio Hadley, A. (1993), *Teaching Language in Context.* Boston: Heinle and Heinle

Savignon, S. J. (1985), "Evaluation of communicative competence: The ACTFL provisional proficiency guidelines," *Modern Language Journal* **69**, 129-142

(訳: 西森敏之)

付録 1

Naijin Travel

Where you're part of the gang!!

Vacation 1

Vacation 2

to: _____
_____ nights and _____ days
breakfast lunch dinner

to: _____
_____ nights and _____ days
breakfast lunch dinner

price _____

price _____

Highlights _____

notes _____

Vacation 3

Vacation 4

to: _____
_____ nights and _____ days
breakfast lunch dinner

to: _____
_____ nights and _____ days
breakfast lunch dinner

price _____

price _____

Highlights _____

notes _____

付録 2

How the interviews will be graded

Grade	与えられた情報	受け取った / 尋ねられた情報	コミュニケーション能力	ディスカッション能力
Honors	常に、求められている情報を伝え、その上で常にそのほかの情報を付け加え、会話を継続させている。	会話を継続させる情報、また既出の情報に関連した情報を求めることができる	会話の内容について適切な受け答えをする。他の人が言葉に詰まったとき言い直したり、言い替えたりして助ける。	ディスカッションに非常に積極的に参加し、自分自身の意見を自由に述べるうえ、他の人の意見に対しても発言する。
Pass	求められている情報を伝え、ときにそのほかの情報を付け加えることもある。	何らかの情報を求めることはできるがそのあとうまくつながる質問ができないことがある。	会話には参加するが、率先するわけではなく。意思疎通がうまくいかないときでも相手をいつも助けるわけではない。	意見は述べるが、非常に基本的な説明をするにとどまる。他の人の意見に質疑したりしない。
Fail	尋ねられたことしか答えない。答えが非常に短い、もしくは試験官が理解できない。	あまり情報を求めない、もしくはまったく情報を求めることがない。質問も1つづつにとどまりそのあとに続く質問をしてより多くの情報を引き出すことはない。	会話を聞いているのみにとどまることが多く、自ら参加しようとしめない。意思疎通がうまくいかなっても自ら会話を立て直そうとしない。	ディスカッションにほとんど参加しない。尋ねられれば意見を述べるが、それについて説明はしない。